

## 第2回 欲動理論における愛と憎しみ

重元寛人

欲動理論は、フロイトの精神分析学においてもっとも根本をなす理論である。その中で「愛」や「憎しみ」といった概念はどのような位置づけにあるのだろうか。中期の著作『欲動とその運命』（1915）の論旨にそってみていこう。

まず、欲動の定義から。

### 欲動の定義

次に心的な生を＜生物学的な観点＞から考察してみると、＜欲動＞は精神的なものと身体的なものの境界概念と考えられる。これは体内から発して精神に到達する刺激の心的代表であり、精神的なものが身体的なものと結びついているために、精神的なものに要求される仕事の大きさの尺度とみられる。

（『欲動とその運命』 ちくま学術文庫『S.フロイト自我論集』竹田青嗣編／中山元訳に収録）

だいたいにおいて、こういった基礎的な概念の「定義」というのはわかりにくいものだ。どうしても抽象的になってしまう。

われわれの心の中には、いろいろな願望、欲求、感情などがわき上がってきて、それにもとづいて、悩み、考え、行動する。欲動とは、そういった心の営みの原動力と考えたらよいだろう。それは、体内から発して精神に「あれをせい、これをせい」と圧力をくわえてくる。

欲動と関連した概念として、以下のものが説明されている。

**欲動の心迫**：欲動がどれだけの仕事を要求してくるか

**欲動の目標**：欲動がなにをしろと要求してくるか

**欲動の対象**：誰（何）に対してそれをしろと要求してくるか

**欲動の源泉**：欲動が体のどこからわき上がってくるか

この時期のフロイト理論では、基本的な欲動として**性欲動**と**自我欲動**（自己保存欲動）を想定している。（後期の理論では生（性）の欲動と死の欲動を基本的な二つの欲動として

いる。これについては後述。)

このうち、良くわかっているのは性欲動。次のようなことがいえる。

性欲動は、多数で多様な器官を源泉として発生するものであり、最初は互いに独立して活動するが、その後である程度まで統一的なものとして統合される。それぞれの性欲動がめざす目標は、器官快感の充足である。完全な統合が実現した後に、性欲動は初めて生殖機能に奉仕するようになり、性欲動として一般的に認識できるようになる。(『欲動とその運命』)

これをもう少し具体的に説明してみよう。『性欲論三篇』(1904)によると、小児の性欲の発達は**多型倒錯的**である(ばらばらで目的にかなってない)。

口や唇を源泉とした性欲動は、母の乳房や自分の指を対象として、「吸う・嘔む」といった目標を追求する(**口唇期**)。

肛門を源泉にした性欲動は、自分の糞便を対象とし、「貯める・出す」といった目標を追求する(**肛門期**)。

ペニス(クリトリス)を源泉とした性欲動は、自分の手でこすることを目標とする(**男根期**)。

そして、最終的にこれらの部分欲動は、性器のもとに統合され、異性のパートナーを対象に、性器どうしを結合させ精液を放出するという性行為を目標とするようになる(**性器期**)。(男根期と性器期の間には、一時的に性欲が陰をひそめる**潜在期**がある。)

それでは性欲動は、それぞれの目標を行動によって実現させて、「はい、おしまい」となるかということ、そうではない。いろいろな、現実の制約がそれを許さない。子供の手淫は大人によって禁じられるし、大人にとっても性的な欲求は、いつでも充足できるわけではない。

つまり、精神装置は、**快感原則**に従うだけではなく、**現実原則**をも配慮しなくてはならない。

このため、性欲動はその目標を単純に実現することが出来ずに、さまざまな変形をこうむる場合が多い。このような、欲動の運命として、フロイトは4つのものをあげている。

対立物への逆転

自己自身への方向転換

抑圧

昇華

このうち抑圧と昇華については別の論文で述べるとし、『欲動とその運命』では前二者について「サディズムとマゾヒズム」、「窃視症と露出症」の例をもちいて説明している。(ただし、抑圧については『抑圧』という論文があるが、昇華についての論文はフロイトが自分で廃棄したという噂である。)

その際、特徴的なことのひとつは、「発展のそれぞれの時点において、欲動の動きと同時にその対立物が観察されるという事実」である。フロイトは、このことを、E・ブロイラーの用語を借りて「アンビヴァレンツ (両価性)」と呼んだ。

いよいよ、この章の主題に入る。「愛と憎しみ」である。

フロイトは、感情のアンビヴァレンツのきわめて重要な実例として「愛と憎しみ」をあげた。

愛と憎しみの対立は、われわれの欲動図式にあてはまらないという意味で、特に興味深いものである。この両方の〈感情対〉と性生活のきわめて密接な関係を疑うことはできないが、ほかの部分欲動とおなじように、愛が性欲の特別な部分欲動であると考えられることは、当然ながら反感を感じる。愛するということは、性的な感情の全体の表現であると考えたいのである。しかしこれではわれわれの問題は解決されないものであり、この性的な感情と内容的に反対である憎しみをどのように理解すべきか、戸惑わざるを得ない。(『欲動とその運命』)

フロイトというとなんでも性欲で説明しようとしたようなイメージがある。だからきっと、「愛」も性欲動の派生物であるくらいに考えたのではないかと思うと、どっこいそうではない。

愛は、性欲の部分欲動ではない。

愛するということは、性的な感情の全体的な表現である。

これだけではまだあまりぴんとこない。しかし、ここに重要なポイントがある。

性欲の場合、最初は統合されないばらばらの状態 (部分欲動) からスタートし、後になってからいくつもの部分欲動があわさって、成熟した大人の性欲になるのであった。

これに対して、愛は、最初から全体的なものようだ。

次に、フロイトは、愛に関する3つの対立関係というものを持ち出し、それを、心的な生が支配されている「3つの対極性」と関連づけている。これをまとめると、次のようになる。

愛についての対立関係	心的な生の対極性	その特性
愛・憎しみ 対 無関心	主体（自我） — 対象	現実的な対極性
愛 対 憎しみ	快 — 不快	経済論的な対極性
愛すること 対 愛されること	能動 — 受動	生物学的な対極性

突然このような図式がでてくるのは、なにか唐突な気もするが、フロイトはこういう「対立関係」とか「対極」といったものを設定して、論述していく方法がすきだったみたいだ。あまり気にせずすすめていこう。

性欲と違って、愛は最初から全体的なものらしい。では、最初から完成されているのかというと、もちろんそうではない。

では、発達論的にみた場合、「愛」はどのように始まり、どのように成長していくのか。

心の原初的な状況においては、自我は欲動によって備給されており、その欲動を部分的にはみずから満足させることができる。この状況はナルシズムと呼ばれるもので、このような欲動の満たし方を自体愛的と呼ぶ。その時点で外界は（一般的な意味で）関心によって備給されていない。外界は、満足を得るという目的ではかわりがないのである。この時期にあっては、自我／主体は快を感じるものと一致しており、外界は快とは無縁なもの（あるいはいずれは刺激の源泉として、不快をもたらすもの）と一致している。ここでは仮に、快の源泉に対する自我の関係を＜愛＞と定義しておく。すると、自我が自らだけを愛し、世界に対しては無関心である状況は、「愛すること」についての最初の対立関係（注：愛・憎しみ 対 無関心）を説明するものとなる。（『欲動とその運命』）

どうやら、愛の起源はナルシズムと密接に関係があるようだ。

上の説明を素直に読むと、心の原初的な状況はナルシズムであり、それが愛の原型となる、とこういうことになりそうだ。

### ナルシズム（自我の自らにたいする愛） = 愛の原型

ナルシズムは、フロイト理論において重要な概念のひとつであるが、心の原初的な状態であるだけにわかりにくい部分も多い。彼自身、その理論を何度も修正している。特に、後期の構造理論（自我・エス・超自我）の登場とともに、ナルシズムの理論にも重大な修正が加えられた。そういうことまで考えると、上のような言い方にも実は少し問題がで

てくるのだが、ここではこれ以上深入りしない。

ともかくナルシシズムは心の初期の状態であり、ここにはある種の安定があるので、小児はこれをなるべく維持しようとするようだ。しかし、やがて自我だけでは、快は維持できないことがわかる。体の内部から不愉快な刺激がやってくるし、外にも快感をもたらすものがあるらしい（ということにうっすら気づく）。

このとき自我がとる道は、現実をしっかりと認識することではない。むしろナルシシズムを維持するためにつぎのような方法をとる。

自我は自体愛的に存在している限りは、外界を必要としないが、自己保存欲動のさまざまな経験に基づいて、外界から対象を獲得するようになる。そしてしばらくの間は、内的な欲動の刺激を不快なものとして感じざるを得なくなるのである。快感原則の支配のもとに、自我はさらに新たな発達を遂げる。自我は、提供された対象が快感の源泉である限りにおいて、みずからの自我の内部に取り入れ、みずからの内部に〈取り込み〉を行う（フィレンツィの表現による）。他方では、みずからの内部で不快の原因となるものは、外部に追い出してしまう（後に取り上げる〈投影〉のメカニズムを参照されたい）。

このようにして自我は、適切な客観的な特徴によって、内的なものと外的なものを区別していた最初の現実自我から、快という特性を最高の基準とする純化された〈快感自我〉に変化する。この快感自我にとっては外界は、自我が同化した快の部分と、見知らぬものであるその他の部分に分割される。快感自我は本来の自我からその一部を分離し、それを外界に投げ出し、〈敵対的なもの〉として感じる。このような新たな再配置が行われた後、次の二つの極性が再び一致するようになる。

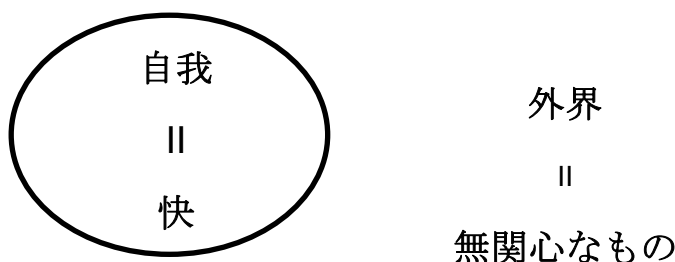
自我／主体：これは快の部分と一致する。

外界：これは不快の部分（以前は無関心だった部分）と一致する。

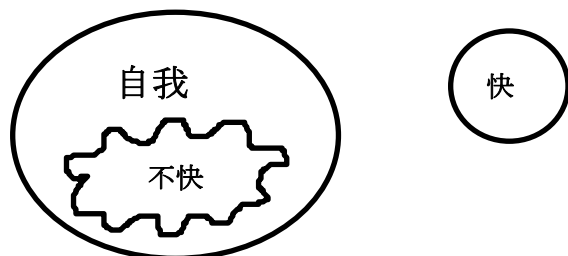
（『欲動とその運命』）

ちよつとややこしいので、図にしてみる。

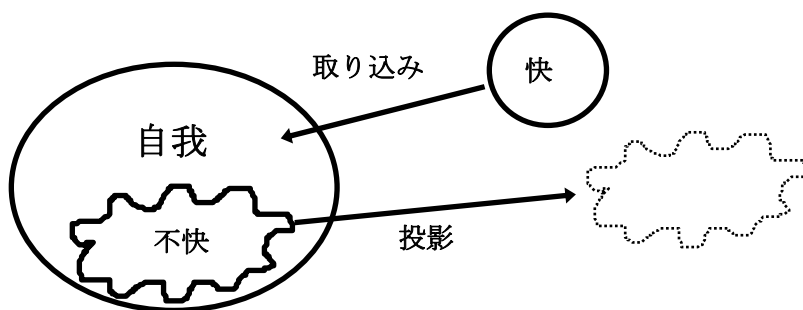
## 1. 最初のナルシシズム



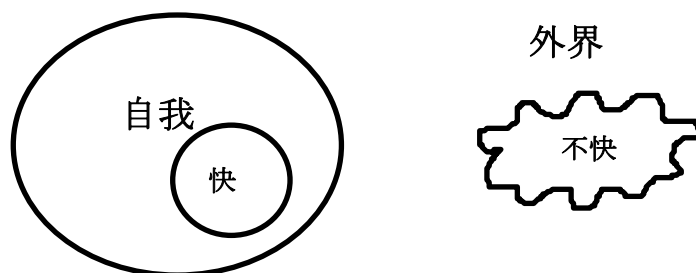
2. 外界にも快の源泉が登場、そして内側から不快な刺激が……



3. 快の源泉を取り込み、不快の原因となるものを投影する



4. 自我=快、外界=不快の状態（ナルシシズムは維持される）



あまりうまい図ではなかったかもしれないが、とにかく、**投影**と**取り込み**の機制によって、なんとかナルシシズムを維持することができたわけだ。

さて、次の段階にすすむ。対象の登場である。自我と対象との関係が成立してはじめて、愛は憎しみと対立するものになる。愛が愛らしくなる。

一次ナルシシズムの段階において対象が登場すると、愛の第二の対立関係である<憎し

み>が形成されるようになる。

(中略)

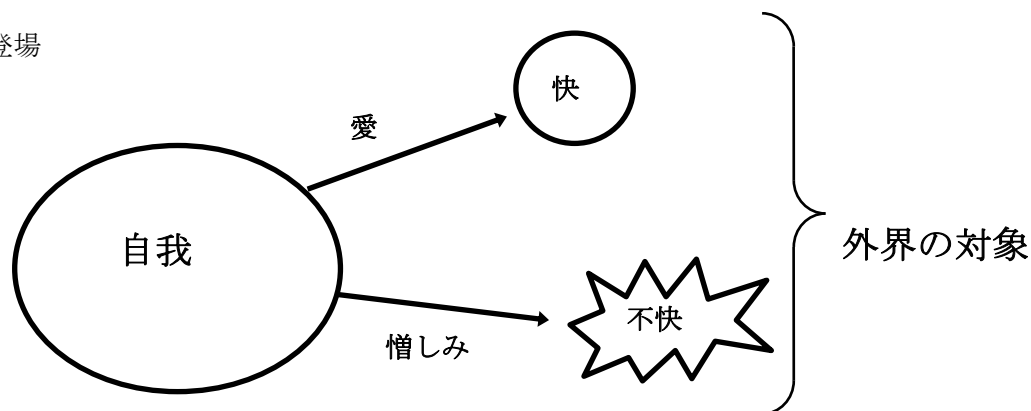
純粋なナルシズム的な段階が解消されて対象段階に進むと、快と不快は、対象と自我の関係を意味するようになる。対象が快の感覚の源泉となると、運動傾向が生じ、対象を自我に近づけ、自我に同化しようとする。これが快をもたらす対象の発散する「魅力」であり、その場合はわれわれは対象を「愛する」という。これとは逆に、対象が不快な感覚の源泉である場合には、この対象と自我の間の距離を確保し、さらに対象を遠ざけようとする傾向が働く。これは本来は刺激を送り込む外界からの逃走の試みであったものを、自我と対象の間で反復するものである。この場合は自我は対象に対する「反発」を感じ、対象を憎む。この種の憎しみは、対象に対する攻撃傾向や、対象を抹殺しようとする意図にまで高まることがある。

(中略)

こうして「愛する」という表現は、対象に対する自我の純粋な快の関係の領域に限定されるようになり、最後には狭義の性的な対象や、昇華された性欲動の必要性を満足させる対象に固定されるようになる。(『欲動とその運命』)

図にしてみると……

## 5. 対象の登場



**愛**：快をもたらす対象を自我に近づけようする傾向

**憎しみ**：不快をもたらす対象を自我から遠ざけようとする傾向

この段階で、自我が、快をもたらす対象を近づけ、不快をもたらす対象を遠ざけようとするというところは、3.の取り込みと投影に似ている。しかし、この段階では、自我は外界と内界、自我と対象の区別をしっかりと認識している。そして愛と憎しみは、自我と対象の関係のありかたを意味するようになる。

ここでいう、快とか不快とかいうものは具体的にはどのようなものか。赤ん坊にとっての快・不快は、まず生理的なものだろう。「おなかがすいた」「おしりがぬれて気持ちが悪い」「暑い・寒い」といった不快と、「おなかがいっぱい満足」「すっきり排泄しておしりもきれいで気持ちよい」「ほどよい暖かさで快適」といった快が考えられる。

そして、フロイト理論で重要な小児性欲のもたらす、快と不快がある。(もともと性欲と生理的欲求はごく初期には区別しがたいものでもある。)

「愛・憎しみ」と性欲の発達がどのような関係にあるのか見ていこう。

愛は、自我が<器官快感>を獲得することによって、欲動の刺激の一部を自体愛的に満足させることができることに由来する。愛は根元的にナルシズム的なものであるが、その後は拡張された自我の中に同化された対象にも適用されるようになる。そして愛は、快感の源泉としての対象を求める自我の運動を表現するのである。愛はその後の性欲動の活動と密接に結びついていて、性欲動の統合が完了すると、性的な営みの全体と一致するようになる。愛の前段階は、性欲動が複雑な発展を遂げる間に、仮の性的な目標として登場する。こうした性的な目標の最初のものとして、<体内化>や<貪食>がある。これらも一種の愛であり、対象が自己と分離して存在する状態を解消しようとするものであるため、アンビヴァレントなものと呼ぶことができる。前性器的な肛門サディズム期の性体制の段階では、対象を求める営みは支配衝動として現れる。この衝動にとっては、対象が破壊されようと、抹消されようと、問題ではないのである。この前段階で、このような形態にある愛は、対象との関係においては憎しみと区別することができない。性器体制が確立された後に初めて、愛が憎しみの対立物になるのである。(『欲動とその運命』)

愛・憎しみと、性欲動の発達は、密接に関連している。前性器体制では、愛もまだ不完全で、「食べてしまう」(口唇期)とか、「支配する」(肛門期)といった形をとり、憎しみと区別がつかない。つまりアンビヴァレントである。

性器体制になってはじめて、愛は、憎しみの対立物になり、性欲のめざすところと愛のめざすものが一致するようになる。

## まとめ

愛の起源は、ナルシズムと密接な関係がある。

愛・憎しみは自我と対象との関係のありかたである。

前性器体制には愛と憎しみは区別がつかずアンビヴァレントである。

性器体制において、愛は性的な営みの全体と一致するようになる。